

# ルワンダ王国の *Gicuraasi* 月の儀礼

宇 野 公一郎

## 目次

1. はじめに
2. ルワンダの季節、農業暦、月
3. *Gicuraasi* 祭の諸解釈
4. 「*Gicuraasi* の道」の訳と解説
  - a. *Gicuraasi* 祭の開始 (1-13)
  - b. *Gicuraasi* 月の禁忌 (14-29)
  - c. 服喪期間の終了 (30-56)
  - d. 王権太鼓の復活 (57-85)
  - e. 王の「即位」と王権の再活性化 (86-110)
  - f. Gaseke の牛王祠での *gicuraasi* 儀礼 (111)
  - g. 「*Gicuraasi* を立ち去らせる」祝祭 (112-125)
5. おわりに

## 1. はじめに

ルワンダの宮廷儀礼の最も大きな機能は、これまでに見てきた諸儀礼（宇野 2010, 2011, 2012, 2013, 2014, 2015a, 2015b）に繰り返し表れていたように、衰退の危機を克服して王国の再充実を図る再活性化の機能である。それらの儀礼は実施頻度の低い大規模な儀礼であったが、秘典に収録された小規模の年中行事的な宮廷儀礼や、人々の生活や生業に直接係わる出来事（旱魃、洪水、獣疫、蜂蜜の収穫減）に対処する宮廷儀礼にも、危機と復活のモチーフが反復される。

本稿で扱う「*Gicuraasi* の道」<sup>1</sup>の儀礼は、「初穂の道」に描かれた新穀儀礼とともに、「ルワンダ宮廷で最も厳粛に毎年行われた二大祭礼」とされる (Pagès 1933: 498; Kagame 1947: 275, 276)。この二つの祭礼は一つの通年的な儀礼システムを成していたと考えた方が理解しやすい面もあるが、秘典で別々に記述され、また紙数の関係もあるので、分けて論じることにした。

先ずルワンダの季節と暦について述べ、次に *gicuraasi* 祭の目的についての諸解釈を瞥見し、最後に「*Gicuraasi* の道」を訳出する。

## 2. ルワンダの季節、農業暦、月

ルワンダには大小の二つの乾期と雨期がある。農家は雨期の初めに播種し、多くは次の乾期の間に収穫する。伝統的な暦はこの降雨に従う農業のリズムに対応し、新年はソルガム (*amasaka*) の播種祭 (*umuganuro*) に始まった。「年」を表す単語 *umwaka* 自体、ソルガムの「収穫」を意味する単語 *amaka* に由来した。

ルワンダの伝統的な一か月は、三日月 (*umutaaho* 「(月が) 戻ること」) から次の三日月までをいい、日没時に空のどこかに月が出ている月の前半 (*imyezi* < -*eeji* 「月」) と、日没時に空のどこにも月が出ていない後半の期間 (*imyiijima* 「闇」) に分かれた (Bourgeois 1957: 606–607; Coupez *et al* 2005: 23–24, 457–458, 1023, 2405)。

ルワンダの伝統的な一年には十二ないし十三の「月」(単 *ukweezi*、複 *ameezi*: 暦の太陰月と天体の月の両方を指す) があったといわれるが、十三番目の月に関して大きく二つの説がある。

一つは、Kagame 神父を代表とする説で、一年は基本的に十二の太陰月から成ったが、ときどき閏月が入れられたとする。閏月は *mata* 「牛乳」と

---

<sup>1</sup>「*Gicuraasi* の道」のルワンダ語原文とフランス語訳は、d'Hertefelt & Coupez 1964: 68–75 にある。*gicuraasi* は陰暦の月の名前であるが、以下、月名を数字で表記する際には、陰暦の月は漢数字で、西暦の月はアラビア数字で書くことにする。また、引用文におけるルワンダ語の綴りは本文における綴りと多少違うことがある。

呼ばれ、必ず大雨期の *weerurke* 月（陰暦七月）と *gicuraasi* 月（八月）の間に挿入された。閏年の間隔（三年に一度とか）は決まっておらず、毎年 *ka-mena* 月（九月）に行われるソルガムの新穀儀礼との関連で、季節と暦のずれが大きくなりすぎたと宮廷儀礼家たち（*abiiru*）が判断した時に適宜入れたという（Kagame 1959: 63, note 1）。

第二は Pagès 神父の説で、一年は元来十二ヶ月だったのが、十九世紀後半の Kigeri IV Rwabugiri の時代に、*mata* が加えられて十三ヶ月になったとする。月名の *mata* は、豊穡の比喻である「牛乳」であると同時に、Rwabugiri の父 Mutara II Rwogera が王宮を構えた Marangara 地方の丘の名前でもあった。この丘はそこに住む者を幸せにするという評判であった。しかし、伝承によると、数年続けて雨が不足し、作物が実らないことがあった。この不具合を修正するために、もう一ヶ月を *gicuraasi* 月の前に新設して、作物に熟する時間を与えることに決め、丘の名を取って *mata* 月と名付けた。その結果、以前の陰暦十一月と十二月を意味した *gatumba gatoya* と *gatumba kanama* がそれぞれ十二月の前半と後半しか指さなくなったという（Pagès 1933: 427）<sup>2</sup>。

Pagès 説は突飛に見えるが、Kagame 説では閏月のはずの *mata* が植民地時代にフランス語の *avril*（4月）の訳語になったことや、ルワンダ語辞典で *mata* が「ルワンダの伝統的な年の第八の月」定義されていること（Coupez *et al* 2005: 2386）と、そして陰暦十一月の *tumba nyakime* と十二月の *tumba kaanama* が「ルワンダの伝統的な十二番目の月の前半と後半」と定義されていること（Coupez *et al* 2005: 47, 2621; Bourgeois 1957: 607; Lestrade 1972: 350）とも辻褄が合う。しかし、十九世紀後半まで全く季節と月のずれが修正されなかったとも思えないので、ここでは、長期的には Kagame 説、短期的には Pagès 説を採っておく。つまり、以前は不定期に閏月を入れ

---

<sup>2</sup> 13番目の *mata* 月を作ったのは Rwabugiri ではなく父の Rwogera だったという説もある（Bourgeois 1957: 609; Lestrade 1972: 350）。また、*mata* については Pagès 説をほぼ踏襲するが、*gicuraasi* 月を閏月とする説もある（Pauwels 1969: 68）。

て調節していたが、十九世紀後半に *mata* 月が十三番目の月として新設された。そのままではまた修正が必要になったはずだが、二十世紀初の植民地化に伴い西暦が使われるようになり、*mata* は avril (4月) の訳語になって固定されたと推定しておく。

次に季節と農業暦について述べ、各月を大まかに配分する<sup>3</sup>：

#### A. 小雨期 (*Umuhindo*)

9月半ばから12月半ばにかけて、降雨はかなり頻繁に、かなり強くなる。年間雨量の約27%がこの3カ月に降る。湿度が高く、夕方に雨が強く降った後に晴れると、翌朝は霧がたちこめる。大乾期の間に乾ききった土が最初の雨で湿ると種まきが始まる。特に9月～10月にインゲンマメ、グリーンピース、トウモロコシ、ソルガム、シコクビエ、ライマメ (*isogi, gynandropsis*)、ヒョウタン、谷間ではサツマイモ、ジャガイモの播種を始める。10月の播種が終わると、食糧の貯えの残りを心配し始め、節約の時期になる。

1. 陰暦一月 *nzeri* (植民地時代にフランス語の *septembre* の訳語にされた) はこの小雨期の始まりとほぼ重なった。
2. 陰暦二月 *ukwaakira* (フランス語の *octobre* の訳語)
3. 陰暦三月 *ugushyiingo* (フランス語の *novembre* の訳語)
4. 陰暦四月 *ukubozza* (フランス語の *décembre* の訳語) は次の小乾期に多かれ少なかれ跨っていたと思われる。

#### B. 小乾期 (*Urugaryi*)

12月末から雨は減るが、1月も雨は全く降らなくなりはず、2月になると急速に増える。だから「小乾期」は雨が降らないわけではなく、降雨が少

---

<sup>3</sup> 以下の記述は、Sirven, Gotanegre, et Prioul 1974: 27-29 (季節、気候)；Leurquin 1960: 34-35 (食糧、飢饉)；Lestrade 1972 (季節、月、作物)；Bourgeois 1957: 607 (同)；Pauwels 1969: 65-69 (同)；Coupez *et al* 2005: 27, 219, 554, 852, 1282, 1489, 1637, 1647, 2261, 2448, 2622, 2777, 2836 (月、季節)；Gravel 1968: 33-36 (気候)；Pagès 1933: 425-431 からまとめたもので、細かい部分についてはいちいち出典を示さなかった。作物は植民地時代以降のものも含む。

なめの時期であり、特に東部やキヴ湖岸ではその傾向が強い。1月には、四ヶ月前に蒔いたインゲンマメ、グリーンピース、トウモロコシやイモ類を収穫し、ソルガムの二回目の播種が最高潮に達する。

普通、12月～1月には食糧の蓄えが底をついてくるが、間もなく収穫が始まれば、大事には至らない。しかし天候不順で1月の最初の収穫が失敗すると、端境期の食糧不足は飢饉に変わる。飢饉の兆しが見えた時に収穫の見込みが立たないと大惨事になる。人々は蒔く予定の種を食べ、耕作が続けられなくなる (Leurquin 1960: 34-35)。

5. 陰暦五月 *mutarama* (フランス語の janvier の訳語)

6. 陰暦六月 *gashyaantare* (フランス語の février の訳語)。次の大雨期に多かれ少なかれ跨ったと思われる。

### C. 大雨期 (*Itumba ry'amasaka*)

2月の後半から始まり、地域や年により5月末ないし6月初めまで続く。3月、4月、5月に年間雨量の約40%が降る。特に高地で多い。雷を伴う嵐となり、昼頃から数時間続く。3月は特に農作業が多い。インゲンマメ、グリーンピース、トウモロコシ、サツマイモの二回目を準備する。インゲンマメとグリーンピースは6月～9月の大乾期の間の主な食料となる。9月～10月に蒔いたソルガム (*amahore*) とジャガイモの収穫も始まる。

7. 陰暦七月 *weerurwe* (フランス語の mars の訳語)

8. 陰暦閏七月 *mata* (フランス語の avril の訳語)。「*Mata* は4月 (*werurwe*) と5月 (*gicurasi*) にまたがり、それらの月の間に雨期の終わりの雨が洪水のように降り、それらの雨が農業と牧畜の豊穰の決定的要因になる」 (Bourgeois 1957: 609)。

9. 陰暦八月 *gicuraasi* (フランス語の mai の訳語)。次に来る大乾期に多かれ少なかれ跨ったと思われる。この月が西暦何月に相当するかは諸説がある：「5月に相当」 (Kagame 1971: 91)、「6月」 (Bourgeois 1957: 419)、「5月～6月」 (Bourgeois 1957: 609)、「ほぼ6月」 (Pagès 1933: 539)、「6月の夏至 (solstice

de juin)」(de Lacger 1950: 220)<sup>4</sup>、「4 月半ば～5 月半ば」で 10 月に播種したソルガムの収穫が始まる (Pauwels 1969: 68)。

#### D. 大乾期 (*Iki* ないし *icyi*)

6 月、7 月、8 月にほぼ対応する。東部で 5 月半ば、中部で 5 月末、西部 (分水嶺) で 6 月初めから始まり、東部で 110～115 日、中部で 90～100 日、西部で 75～90 日続くが、ほぼ全国的に 8 月末の「牛の雨」で一時中断される。空気は非常に乾燥し、正午の湿度は東部で 20%、中部のキガリで 35% 程度に下がる。他地方では湿度はもう少し高いが、朝の霧を生じる程ではない。空中に漂う微小なホコリの粒子からなる乾燥したモヤが生じる。日向と日陰、昼と夜の温度差が大きい。放牧地は乾き、牧草は減り、乾いた斜面で牛は滑って転ぶことがある。植民地時代にはヨーロッパの季節に合わせて大乾期をフランス語で *été* (夏) と訳したが、ルワンダは赤道の南側なので、ヨーロッパと反対に *hiver* (冬) に対応する。ソルガムは熟するのに七カ月かかり、1 月に蒔いたソルガムは 6 月から 8 月にかけて収穫する (*amaka*)。

作物の主要な収穫期でもあり、正常な年には、2 月から大乾期までは食糧が豊かで、8 月頃には宴会が多く、穀倉は満ち、存分に食べ、大量のビールを飲む家が多い。3 週間ほど食事をせずにソルガム・ビールだけ飲んで栄養を摂る家さえある (Leurquin 1960: 34)。

10. 陰暦九月 *kamena* (<*kumena* 「(ソルガムを) 刈る」) (フランス語の *juin* の訳語)。Kagame、Bourgeois によれば西暦 6 月、Lestrade によれば、5 月～6 月、Pauwels によれば 5 月半ば～6 月半ばで、大雨期の最後の月。引き続きソルガムの収穫が行われる (Pauwels 1969: 68)。

11. 陰暦十月 *nyakaanga* (フランス語の *juillet* の訳語)

---

<sup>4</sup> *gicuraasi* 月が 6 月の夏至 (実際にはルワンダは赤道よりやや南寄りなので冬至) に当たるとするのは de Lacger だけであるが、もし夏至であったとすれば、*gicuraasi* 祭は太陽が最も遠くなったときに行われたことになり、祭の解釈にも新たな要素が加わってくる可能性がある。

12. 陰暦十一月 *tumba nyakime* (または *tumba*)。上述したように *mata* 月が4月に入って月数が余ったために、この月はフランス語の月名の訳語に使われなかった。
13. 陰暦十二月 *tumba kaanama* (または *kanama* または *gatumba*) (*kanama*= フランス語の *août* の訳語)。

### 3. *Gicuraasi* 祭の諸解釈

「*Gicuraasi* の道」は125行の短いテキストで、記述されている儀礼も比較的単純であるが、他の「道」と違い、題名からは儀礼の目的が読み取れない。そのうえ、これまでに論じた諸儀礼の多くと異なり、この儀礼は植民地時代初期に毎年王宮前広場で行われていたため、それを実際に見たり、見た人から聞いたりした西洋人の文章が残っている。

先人の儀礼解釈は大きく次の三種類に分けることができる：(ア) 王家の祖先、特に *Ndahiro II Cyamatare* の慰霊祭説、(イ) *gicuraasi* 月の慰霊祭と翌月の収穫祭とを対でとらえる説、(ウ) 月の満ち欠けを死と再生の象徴とする月の儀礼説。実際にはこれらの説は必ずしも相互排他的には主張されていないので、違いがわかるよう、やや詳しく訳出ないし要約することにする。

#### (ア) 慰霊祭説

まず、1908年からルワンダで布教活動をしていた *Pages* 神父の著書の一節に「6月に二週間続き、大きな祝祭で終わる毎年の服喪 (*deuil*)<sup>5</sup>」という文章がある：

われわれの6月にほぼ対応し、現地語で *Gichurassi* と呼ばれる太陰月の後半に、有名な毎年の服喪期間 (*deuil*) があり、二週間続く。原則として王のみが服喪期間を守る義務があり、連帯意識によって宮廷全体がそれに加わる。その機会に王は普通の服だけ残し

---

<sup>5</sup> フランス語の *deuil* は、ここでは死別後すぐに一定期間設定される喪、服喪ではなく、毎年行われる死者祭祀、年忌祭、慰霊祭を指すが、後に明らかになる理由により、訳語としては喪、服喪、服喪期間も使うことにしたい。

て装飾品を取り去る。結婚式をしてはならない。遊びや踊りは禁止される。太鼓は朝の九時頃に鳴る起臥太鼓 (*Ndamutsa*)<sup>6</sup> しか聞こえない。

服喪期間が終わろうとするとき、終了の祝祭 (*gukur' igichurassi* 「喪の月を立ち去らせる」) のために、首長たちはルワンダの様々な地点からビールを取り寄せる。祭の前日、小型リズム鼓 (*ishako*)<sup>7</sup> が夜の間に四回鳴って式典を告げる。朝になると他の楽器も加わる。至る所で歓声が上がリ、祝祭が催される広場に群衆が押し寄せる。ダンスが中断なく続き、小姓たちや他の専門家たちも参加する。*Ryangombe* 祭祀<sup>8</sup> のメンバーたちは顔を白く塗り、彼らのいつもの儀式をする。供犠が行われる。

神聖な牛たちが広場に現れ、祝祭に独特の精彩を与える。ビールが大量にふるまわれることは言うまでもない。

慰霊祭が誰のためのものなのかという疑問には、はっきりした答えは返ってこない。儀礼家たちの意見は一致せず、すべての王たちを顕彰するためだという人たちもいるし、名前の忘れられた一人の王妃のためという人もいる。最も多いのは *Ndahiro II Cyamatare* 王を記念するためのものだという説である。この王はまさしく *Gichurassi* 月に、周知の状況で亡くなった<sup>9</sup>。しかしこの難問を解く仕事はもっと事情の分かった人に任せよう。(Pagès 1933: 539-540)

さらに Pagès は、二大祝祭 (慰霊祭と初穂儀礼) における祖先との交流につ

---

<sup>6</sup> 起臥太鼓については「*gicuraasi* の道」8 の訳注を参照。

<sup>7</sup> 小型リズム鼓については「*gicuraasi* の道」32 の訳注を参照。

<sup>8</sup> *Ryangombe* 祭祀はルワンダ中部・南部で盛んな精霊信仰。

<sup>9</sup> *Ndahiro II Cyamatare* は悲劇的な王で、即位後、兄弟との相続争いのために国土が分裂し、早魃が起こった上に、今のコンゴ東部の *Buhavu*=*Bushi* の攻撃を受けて殺され、王権太鼓を奪われた (つまりルワンダは滅んだ)。Ndahiro II の死後、外敵に支配された十一年間はルワンダの暗黒時代として記憶されており、災害が多発し、早魃に襲われ、人畜共に子供が生まれなくなったといわれる (Pagès 1933: 249-250)。Ndahiro II 時代の大早魃の伝承については宇野 2010: 186 を参照。



いて、秘典では触れられていない情報を提供してくれる：

この二つの厳粛な祝祭の機会に、王家の宝物 (*intore*) が展示される。宝物には、あらゆる種類のビーズ玉、首飾り、腕輪、腰巻、織物、細工を施した小さな骨器 (*intimba*)、精巧に加工されたコロブス (*inkomo*)<sup>10</sup> の毛皮等が含まれる。Karagwe 国 [今のタンザニア西部] などを経由して来た輸入品もある。王が死ぬと、その衣服は宝物として保管された。今の王 [1931 年に退位させられた Yuhi V Musinga を指すらしい] も、二大祝祭の機会に、たくさんのビーズ、腕輪、首飾り、等々を主殿<sup>11</sup> の前で展示する。

これは単なる見せびらかしではない。この陳列には亡き王族たちの好意を勝ちとるという目的もある。そのために、列席者の中から何人かを選んで、過去の王たちの物だった (あるいはそう伝えられる) コロブスの毛皮を着せ、王宮の正門奥の主殿の前の広場で歩きまわったり踊ったりさせる。彼らは、その間、「これはあなた方の宝物、あなた方に属した物です。これらの着物、これらの織物、これらの武器、これらのビーズ、等々は、あなた方の物です。私たちがこのお祝いをするのはあなた方の名においてです。私たちは常にあなた方の家臣、あなた方の従僕です」と、声を合わせて繰り返す。儀式が終わると、宝物保管人 (*abanyabyuma*) が次の祝祭まで宝物をしまっておく。

祝祭は、死霊たちを記念し、彼らに捧げ物をするという意味で、ほとんど常に供犠的性格を持っている。(Pagès 1933: 511–513)

---

<sup>10</sup> コロブス：オナガザル科コロブス亜科のアンゴラ・コロブス (*colobus angolensis*)。ルワンダ南西部の Nyungwe の森 (現国立公園) に多い。身長 70 cm くらいの中型猿で、体全体が黒く、顔の周囲と肩に長く白い毛がある。尻尾は身長と同じくらい長く、先が白い。

<sup>11</sup> 主殿は王宮の正門の正面に建てられた大きな建物で、守護祖先霊を祀り、王や王母の睡眠や高官の謁見等に使った。Yuhi V Musinga の Nyanza 王宮の見取り図が Lugan 1997: 200 にある。

1930年代の行政官 Bourgeois もほぼ同様の記述をしているが、宝物を身につけた参列者たちは亡き王たちの生まれ変わりとなったと解釈している (Bourgeois 1954: 44)。

次に、Pagès と同じく白衣の神父団に属した Delmas 神父は、*gicuraasi* 儀礼は Ndahiro II の息子でルワンダの再建者 Ruganzu II Ndori<sup>12</sup> が父王の慰霊のために制定したという伝承を記録している：

人々は数多くの慣習や伝統を Ruganzu まで遡らせる。たとえば、実施月の名前 *gicurasi* (4月～5月) で呼ばれる国家的な服喪は、彼の父 Ndahiro II Cyamatare が命を失った *Rubi rw'i Nyundo* (Nyundo 丘の惨劇) を記念するために創設された。この服喪は Yuhi V Musinga [1931年に廃位]の時代にも行われていた：十二日間、起臥太鼓 *Ndamutsa* 以外の太鼓は沈黙し、起臥太鼓の音にはただ一人の侍女が歓声 (*impundu*) で応えるだけだった。結婚式は全国的に十三日目まで禁止された。その日には、人々は大喜びで太鼓を鳴らして喪の終わりを祝った。風向きが良ければ、王都 Nyanza の太鼓の音が 30 km 離れた Kabgayi の教会にいても聞こえた。(Delmas 1950: 54-55)

また、ルワンダのカトリック布教の歴史調査のために 1937年1月に二週間の予定で派遣されて結局二十七日滞在した南仏のアルビ高等神学校歴史学・考古学教授の律修司祭 de Lacger は、彼の報告書 (1939年初版) の祖先崇拜の章の「王朝のパレンタリア祭」で *gicuraasi* 祭を扱っている。彼も

---

<sup>12</sup> Ruganzu II Ndori はルワンダで最も名高い王で、伝承も多い (Pagès 1933: 251-324; Kagame 1972: 93-108; Coupez et Kamanzi 1962)。それらによれば、Ndahiro II Cyamatare は幼い嗣子 Ndori を隣国 Karagwe に避難させた。Karagwe 王に嫁いでいた父方オバの庇護のもとで Ndori は成長し、ルワンダの再征服を始めた。彼がルワンダに戻ると、旱魃は止み、雨が降って涼しさと豊穡が戻り、人間も動物も再び子供を産むようになった (Pagès 1933: 269, 271)。彼は父が失った太鼓を発見し、ルワンダの旧領地を回復したばかりでなく、周辺地域まで領土を拡張したといわれる。Vansina はこの Ndori が Nyiginya 王朝の創建者で、彼以前の王は実在しなかったと主張した (Vansina 2001: 61; Vansina 2004: 44)。

*gicuraasi* 儀礼を第一義的には Ndahiro II の年忌祭と見るが、その背後に Ndahiro II 以前から続く王室の慰霊祭があった可能性を示唆する：

王の直接の先祖にあたる王たちと王母たちは、不運な Ndahiro を除き、彼らの子孫と人民に対し情け深い。

年に一回、王宮で、王は王朝のすべての先祖を追悼して、キリスト教の Toussaint（諸聖人の日）と Deux novembre（死者の日）を合わせたような祝祭を催す。大首長たち（*abatware b'intebe*）は家来（*abagaragu*）を従え、貢物（*ituro*）をもって参加しなければならない。

王朝のパレンタリア祭（*parentales*）の前には慰霊祭（*deuil*）がある。古代ローマでは慰霊祭は八日続き、二月の満月に始まったが、当地では禁欲期間（*carême*）はローマの二倍あり、6月の夏至の（*au solstice de juin*）*gicurasi* 月の後半と一致する。この月は、気管支炎をもたらす「悪い月」（*ukwezi kubi*）である。慰霊祭の「黒い」<sup>13</sup> 日々の間、王宮の記念祭の聖域周辺では静粛を守る。公用の太鼓は一日に一回、朝の9時頃に鳴るだけである。王は飾り気のない粗末な服装で現れる。王国全体で結婚式は禁じられる。

翌月の喪明け（「白くなること」）は「不吉な月を根こぎにする」（*gukura igicurasi*）と呼ばれる。これは、ラマダンの終了と同じような、まさに全国的な祝祭である。王宮前広場で繰り広げられる場面には、Buganza の放牧地から連れてこられた *nyambo*（王が所有する選ばれた牛たち）の行進があり、Twa たち（宮廷のダンサー）と *ntore*（近衛兵）たちの戦舞、雄牛たちの屠殺、大量の酒盛りがある。

集まった群衆は歌や太鼓や怒号に酔っている。

---

<sup>13</sup> ルワンダ語で「黒くある」（*kwirabura*）は服喪・忌みの状態、「白くなる」（*kweza*）、「白くなること」（*ukwera*）は喪・忌みが明けることを表す（de Lacger 1961: 209）。

この慰霊祭によって王は彼の遠い祖先の一人、Ndahiro II Cyamatare の霊を宥めるのであろう。この王は、家来に見捨てられ、国の暗黒の日々に悲劇的な死を遂げたが、輝かしい Ruganzu II Ndori の父でもあった。しかし、この祝典が彼以前の制度であること、それがもっと一般的な目的をもつこと、王家の祖先全体、そして特に祖国の守護と救済のために残酷な運命を甘受した王族たちを対象としていることは明らかだ。(de Lacger 1961: 219-220)

de Lacger も気管支炎に触れていたが、季節の変わり目に当たる *gicuraasi* の天候と健康の不順をもう少し強調する人たちがいる。たとえば、二十世紀の初めに十六年間ルワンダに住んだ Pauwels 神父は、次のように言う：

赤い月 (*ukwezi k'urutuku*) がわれわれの4月の間に現れるが、4月は *Gicyurasi* と呼ばれ、*ukwezi kubi* 「悪い月」という異名を持つ。なぜならこの月は雨、霧、冷気をしばしば伴うからである。これはリューマチと気管支炎の季節であり、そのため *uryamye ibicurane, igicyurasi kizamutwara* (風邪で寝込む者は4月が連れ去る、つまり殺す)と言われる。この月はまた宮廷で全国的な慰霊祭が Ndahiro II Cyamatare 王 (1580-1590) のために行われる月である。彼は敵 Bakongoro の刃に倒れ、この月に対して「お前は喪 (*deuil*) の月だ。今後もそうであり続けるだろう」と呪ったとされる。十二日間、都では王の太鼓たちは沈黙し、人々は喪服を着る。婚礼は全国で十二日間禁止される。この喪は宮廷の大きな祭によって終わらせられる。*intore* たちが踊り、選ばれた牛たち (*inyambo*) が行進した。(Pauwels 1969: 39-40; Lestrade 1972: 352-354 や Bourgeois 1957: 609-610, note 1 も同様の論調である)

#### (イ) *Gicuraasi* 月の慰霊祭と *Karena* 月の収穫祭を対にする説

まず、Kagame 神父は直截に二つの全国的な祭りを並列させている。単に時間的な前後関係を述べているのか、それ以上の連関を想定しているのかはよくわからない：

Ndahiro II の死は *Gicurasi* 月（5 月に一致する）に起きた。これが、*Kamena* 月（6 月）の初穂儀礼の前に宮廷が毎年行う 2 週間の服喪の起源であった。（Kagame 1972: 91）

ベルギーの民族学者 de Heusch は、この Kagame のテキストを膨らませて、*gicuraasi* 月＝天候不順＝食糧の貯えの払底＝Ndahiro II Cyamatare が殺された月＝ルワンダの滅亡と、*kamena* 月＝ソルガムとシコクビエ（Ndahiro II の後継者 Ruganzu II Ndori がルワンダに持ち込んだとされる作物）の収穫＝Ndori によるルワンダ復興、を対比させる：

*gicurasi* 月は大乾期の開始という特別に危機的な時期を画する。これは食糧難と病気の時期で、Ndahiro Cyamatare の不吉な治世を思い起こさせる。Kagame は非常に明確に述べている：「Ndahiro の死は *gicurasi* 月（5 月に一致する）に起きた。これが、初穂儀礼の前に宮廷が毎年行う 2 週間の喪の起源であった（Kagame 1972: 91）」。 *gicurasi* 月の儀礼は、過剰な乾燥によって特徴づけられる王朝の大危機を指示している。神話においては Ndahiro Cyamatare の死とその後継者 Ruganzu Ndori の到来は、乾燥から雨への、食糧難から豊穡への移行を含意している。 *gicurasi* 月の儀礼は、ルワンダにのしかかる毎年の飢饉の脅威を払いのける。 *gicurasi* 月の食糧難に *kamena* 月の豊穡が取って代わり、初穂儀礼が行われる。（de Heusch 1982: 171–173）

しかし前節で見たように、*gicuraasi* 月やその前後が特に食糧難や飢饉に脅かされる時期とは必ずしもいえないので、de Heusch の構造分析はやや行き過ぎている部分がある。

### （ウ）月の儀礼説

最後に、ベルギーの民族学者 d'Hertefelt と言語学者 Coupez は、秘典の解説において慰霊祭説を完全に否定している：

この儀礼は大乾期が始まる直前の *gicuraasi* 月（5 月）の後半に毎年行われた。この月の暗い夜々と次の *kamena* 月の出現は死と再生

の観念を喚起させる。国はこの宇宙的なドラマに、生殖活動の停止、豊穡をめぐる諸儀礼の遂行の禁止、その喜びと生命力の表出の禁止、そして正常な生活の再開を告げる公共の祝祭によって結びつけられている。月のシンボリズムが特に *gicuraasi* 月で強調された理由は、雨期から大乾期への移行に伴う困難によって説明できそうである。ルワンダの気候は昼間の気温と夜間の気温の相当大きな開きによって特徴づけられ、この温度差は特に大乾期の初めに顕著である。この時期には病気が頻繁に起こるが、過去には、この時期に食糧の貯えが尽きただけに、一層病気に抵抗することが難しかった。*gicuraasi* 月の悪評は *uryamy ibicuraane, gicyuraasi kizaamutwara*（風邪で寝込む者は4月が連れ去る）という俗諺にも表れている。

Pagès や de Lacger は儀礼を十六世紀末の Hutu と Havu の一部族との軍事同盟によって殺された Ndahiro II Cyamatare の死の記念祭として、あるいは名前の忘れられたある王母の死への、あるいはルワンダの防衛のために死んだすべての王族たちの死への哀悼 (*deuil*) と解釈した。「*gicuraasi* の道」のテキストはこの解釈を支持することを許すいかなる情報も含んでいない。「*gicuraasi* の道」は明らかに月の儀礼 (*rituel sélénique*) である。

しかし、土着の農民の原始的な月崇拜に宮廷儀礼家たちが王朝の起源と意味を与えたことを認めることは非常に是認できる。二十世紀の前半にはルワンダ北部の Hutu においては、Tutsi の支配の文化的・政治的影響にほとんど損なわれていないこのタイプの諸儀礼の事例をまだ見ることができた (d'Hertefelt 1962: 79)<sup>14</sup>。さらに、

---

<sup>14</sup> この原注が指示する箇所には非常に簡単な文章しかない:「新しい月の出現は、少なくとも北部や Twa *hunyū* のところのようないくつかの地域では、拍手喝采と角笛の音（その意味は不明）に迎えられる。いくつかの儀礼は月に死と再生のシンボルを見ることを許す。」

Tutsi による征服以前に農民の小さな共同体を支配していた Hutu の政治的首長たちの「超自然的な」力をルワンダの王たちが横取りしたことは比較的確かなように思われる。このことは、降雨を制御するという典型的な農耕儀礼において見られるが、これは、いくつかの山地部でつい最近まで生き残っていた何人かの Hutu の小王が行い続けていた活動である (d'Hertefelt 1962: 61–62)<sup>15</sup>。(d'Hertefelt & Coupez 1964: 49–50)

「*gicuraasi* の道」には慰霊祭説を支持する記述が全くないという主張に関して、王朝秘典 (*ubwiru*) の採集者でもある Kagame 神父は、この「道」が Ndahiro II の非業の死に触れないのはそれがルワンダにとって最も屈辱的な出来事で、Ndahiro という王号を口に出すこと自体がタブーだったからだとし、秘典の最も重要な部分である「歴史的説明と注釈」(*intekerezo*) には Ndahiro II への言及があったことを示唆している (Kagame 1972: 92; cf. Bourgeois 1954: 45. *intekerezo* については宇野 2007: 120 を参照)。実際、後で見るように、「*gicuraasi* の道」は王の葬式や即位式の要素を多く含んでおり、慰霊祭説を「支持することを許すいかなる情報も含んでいない」とは言えない。

#### 4. 「*Gicuraasi* の道」の訳と解説

##### a. *Gicuraasi* 祭の開始 (1–13)

*Gicuraasi* 月には上旬から静粛にするが、儀礼が始まるのは下旬からである。下旬に入ると太鼓を一齐に鳴らして喪の謹慎の開始を合図する。

##### [1–2: *Gicuraasi* の月初めから王権太鼓は活動を控える]

*Gicuraasi* の三日月が見える (*yabonetse*) と<sup>16</sup>、

---

<sup>15</sup> この原注が指示する個所では、Tutsi がエチオピア西南部～スーダン南部から移住してきてルワンダの土着民を征服したが、*hiinza* と呼ばれた土着の首長たちの最後の生き残りは 1920 年代までいたと書いてある。*hiinza* (小王、土酋) について詳しくは宇野 2011: 128 以下を参照。

<sup>16</sup> [1] 「三日月が見える (*-bonek-*) と」：つまり、月が始まると。なお王は、*gi-*

王権太鼓たち (*ingoma*)<sup>17</sup> (59, 62, 77, 84, 110) は王に差し出されない<sup>18</sup>。

### [3-13: *Gicuraasi* 月の二十日頃に王が服喪を開始する]

日没時に月が空に見えなく (*kwijima*)<sup>19</sup> になったら、  
五日待つて<sup>20</sup>

[5] 王は家 (*nzu*) に行く<sup>21</sup>

王に王権金鎚 (*inyundo*) (35, 87) と発火錐 (*ubushingo*) (36, 87)  
が差し出される<sup>22</sup>。

彼は王座 (*inteeke*) に行く。

起臥太鼓 (*indamutsa*)<sup>23</sup> (25, 37, 91) が挨拶をする。

その間に太鼓たち (*ingoma*)<sup>24</sup> (54, 92, 105) が設置され、

[10] *abakaraza*<sup>25</sup> のリズムで一斉に鳴り始める (*suk*)。

---

*curaasi* 月に限らず、三日月を直接見上げることは許されず、牛乳壺の中に映してしか見ることができなかった (Bourgeois 1954: 47)。

<sup>17</sup> [2]「王権太鼓たち」：具体的には、筆頭の Karinga 鼓とその配偶の Cyimumugizi 鼓、そして十九世紀末に Kigeri IV Rwabugiri が作った Kiragutse 鼓と Mpatsibihugu 鼓があった (宇野 2011: 96-97)。王権太鼓は四世代に一度、牛王が行う水飼儀礼の前半に更新された (宇野 2014)。

<sup>18</sup> [2]「王に差し出されない」：新しい月が始まると宮廷でも民間でも祝った (Bourgeois 1956: 37; Lestrade 1972: 67) が、*gicuraasi* 月の初めには祝わない。

<sup>19</sup> [3]「日没時に月が空に出ていない (*kwijima*)」：動詞 *-ijim-* は、「暗くなる、(月に関して) 十五夜を過ぎ、日没時に月が見えない時期にあること、月の後半にあること」(Coupez et al 2005: 1023)。

<sup>20</sup> [4]「五日待つて」：二十日頃か。

<sup>21</sup> [5]「家 (*nzu*) に行く」：*gicuraasi* 月の後半には、王は主殿 (*kambere*) とは別の建物に移ったようである。

<sup>22</sup> [6]「王権金鎚と発火錐」：王権の象徴、王のお守りとして、これらは王と共に移動する。詳しくは、宇野 2013: 94, note 22, 103, note 56, 117-118 を参照。

<sup>23</sup> [8]「起臥太鼓 (*-ramutsa*)」：王と王権太鼓たちに朝晩の挨拶をする太鼓。そのほか、王が謁見する際などにも鳴らした。＜動詞 *-ramuts-*：「出会って挨拶する、こんにちはという」「起臥太鼓で王に朝の挨拶をする」(Coupez et al 2005: 1842-1843)。起臥太鼓は各王が即位するたびに新調された (宇野 2013: 107-111)。

<sup>24</sup> [9]「太鼓たち (*ingoma*)」：普通の打奏用の太鼓 (*ingoma z imivugo*) であろう (d'Hertefelt & Coupez 1964: 304)。

<sup>25</sup> [10]「*abakaraza* のリズム」：*Abakaraza* は、宮廷儀礼家序列第二位の Tege リニジが指揮する軍の一つで、主な任務は、宮廷で王の起床と就寝の合図などのために起臥太鼓を鳴らし、定期的に太鼓の皮を新調し、撥を作り、四つの王権太鼓の



しかし *abatimbo*<sup>26</sup> のリズムでは鳴らない。

鳴り終えたら

太鼓の撥 (13) を王に差し出す<sup>27</sup>。

## b. *Gicuraasi* 月の禁忌 (14-29)

まず、Tsoobe の儀礼家が儀礼期間中の禁忌を告知する。

### [14-20: 服喪中の禁忌]<sup>28</sup>

主席儀礼家<sup>29</sup> が屋敷 (*ruغو*) に行って<sup>30</sup>

[15] こう言う: 「良く聞け、人々よ、

---

うちの二つ (Cyimumugizi 鼓と Kiragutse 鼓) を警備し、運搬することだった。Abakaraza は神話的始祖 Gihanga 王が Cyimumugizi 鼓の警備のために創設し、Ruganzu II Ndori 王以後、Tege は起臥太鼓の製作にも携わるようになったと言われる (Kagame 1947: 368; Kagame 1963: 23-26; Gansemans 1988: 212-214)。新王の即位時の Tege の儀礼王による起臥太鼓と小型リズム鼓の製作については宇野 2013: 107-111 を参照。

<sup>26</sup> [11] 「*abatimbo* のリズム」: Hertefelt & Coupez は Abatimbo を Karinga 鼓に専門的に仕える太鼓奏者集団とする (cf. Hertefelt & Coupez 1964: 304)。Gansemans によれば、Abatimbo は Nyanza 近くの Nduga の Mukingo 丘に住んだ太鼓演奏家 Mutimbo の子孫たちで、Karinga 鼓の警備と世話をした太鼓演奏家集団だったという (1988: 213-214, 242-244)。他方、Kagame は、Karinga 鼓の警備と世話をしたのは Ishyama 軍で、宮廷儀礼家序列第四位の Kobwa リニジがこの集団を指揮したという (Kagame 1947: 369-370; Kagame 1963: 20-23)。*Gicuraasi* 月の儀礼のこの文脈で面白いのは、Abatimbo という太鼓演奏集団がブルンジにもいて、初穂儀礼そしてヨリ一般に豊穡や農業の繁栄と結びついていたという情報である (Gansemans 1988: 214)。ルワンダでもそうだったという証拠はないが、もしそうだったら、*gicuraasi* 月の儀礼の始まりにあたって *abatimbo* のリズムが使われないのは当然であったろう。

<sup>27</sup> [13] 「撥を王に差し出す」: 太鼓を打ち終えたら、撥を王に渡すきまりがあった。

<sup>28</sup> [14-20] 服喪中の禁忌: 「不敬の道」26-27 は、王が亡くなった時に最も厳格に守られるべき禁忌として、人間、牛その他の生物の生殖活動の禁止を挙げている。ルワンダ人は親や配偶者が死ぬと一ないし二カ月、王が死ぬと四カ月の喪に服したが、喪中には生殖行為のほか、播種、鉄鍬による耕作、歌舞、宴会、飲酒などが禁止された (宇野 2012: 54-55)。*Gicuraasi* 月の禁忌はそれより期間も短くまた軽かったとはいえ、服喪中の禁忌との類似は明らかである。

<sup>29</sup> [14] 「主席儀礼家 (*umwiru mukur*)」: 宮廷儀礼家の序列第一位の Tsoobe の儀礼王のこと。

<sup>30</sup> [14] 「屋敷に行つて」: 王国の中心としての王宮から全国に禁忌を宣告する。

太鼓たちは退いた (*ziraziritse*)<sup>31</sup>。

誰も結婚しない (117)。

誰も願掛けの儀礼をしない<sup>32</sup> (119)。

誰も自分の武勲をうたわない<sup>33</sup> (118)。

[20] 誰も祝福の歓声を上げない<sup>34</sup> (118)。」

次に、王宮での太鼓使用の規定と、王の就寝時のあいさつの変更が説明される。

#### [21-29: 服喪中の朝晩の合図]<sup>35</sup>

就寝を告げる (*biikiir*)<sup>36</sup> のは Twa の女たち<sup>37</sup> である。

<sup>31</sup> [16] 「太鼓たちは退いた (*ziraziritse*)」: 起臥太鼓以外の宮廷のすべての太鼓は活動を停止した。動詞-*zirik*-は、「太鼓が退職した、つまり王の死に伴う喪の間や *gicuraasi* 月の間、太鼓を鳴らさない」(Coupez et al 2005: 2874) とされるが、王権太鼓は鳴らさないことのほうが普通なので、ここでは「鳴らさない」というより、活動を停止すること。

<sup>32</sup> [18] 「願掛けの儀礼をする (*kumar urbaanza*)」: さまざまな願い (家畜の病気を防ぎたい、家族の病気を治したい、子供を妊娠したい、無事に出産したい、等々) を成就するために、動物を供犠して神霊の加護を求める儀礼をおこなう (d'Hertefelt & Coupez 1964: 295-296; Coupez et al 2005: 134)。

<sup>33</sup> [19] 「自分の武勲を歌わない (*ntaa wiivugo*)」: 動詞-*iivugo*は-*vugo*「話す」の再帰形で、「名を名乗る」「自分のことを話す」「自己讃歌を歌う」「自分の手柄を朗唱する」「自慢する」などを意味し、「-*iivugo* できない男は臆病者だ」と言われた (Coupez et al 2005: 1100)。その名詞形 *icyivugo* (pl. *ibyivugo*) は、「牛飼いの詩」「宮廷の詩」となるブルワンダの三大口誦文芸の一つの「戦士の詩」を指し、戦闘の前後の夜、戦闘中に敵を倒した時、あるいは娯楽のプログラムとして朗誦された。歌い手は立って、手を上にあげ、武器を振り回し、実際の手柄だけでなく、将来立てたいと思う武勲も取り混ぜ、思いつく限りの誇張を施して歌った (Kagame 1969: 15ff; Coupez et Kamanzi 1962: 8-9)。いうまでもなく、服喪中の戦争は禁じられた (Bourgeois 1954: 47)。

<sup>34</sup> [20] 「祝福の歓声 (*impundu*) を上げる」: -*hundu* 10 は、(特に女性が) 口を半開きにして次第に強く、そして次第に弱く出す (Coupez et Kamanzi 1962: 47; Coupez et al 2005: 944)。

<sup>35</sup> [21-29] 太鼓によらない王の就寝の合図: 「即位の道」307-330 に、喪中に即位した新王への朝晩の挨拶の規定があるが、朝晩とも合図はすべて沈黙のうちに王に触れることによって行われる (宇野 2013: 105-106)。*Gicuraasi* 儀礼では起床時には太鼓を鳴らす。

<sup>36</sup> [21] 「就寝を告げる (*biikiir*)」: 動詞-*biikir* の原義は「王の就寝を告げる太鼓をたたく」(Coupez et al 2005: 181) だが、ここでは太鼓を使わずに知らせる。

<sup>37</sup> [21] 「Twa の女たち (*abatwakazi*)」: Twa は、Tutsi、Hutu の下に置かれたルワンダの社会カテゴリーで、主に森の中で採集狩猟や製陶に携わったが、中には王

*Iyombe* の歌<sup>38</sup> によって、  
*Impara* たち<sup>39</sup> と笛吹きたち (*abasengo*) と一緒に。  
 太鼓は鳴らさない、  
 [25] 起臥太鼓 (8, 37, 91) 以外は<sup>40</sup>。  
 宮廷で就寝を告げるたびに  
*Cyirima* 祠<sup>41</sup> (42, 55, 85, 96, 105) に行つて  
*Karinga* 鼓 (66) のいる所で就寝を告げる。  
*Kamena* の月が現れるまで<sup>42</sup>。

### c. 服喪期間の終了 (30-56)

*Kamena* 月の三日月が目撃されると、小型リズム鼓で禁欲期間の終了が予告される。

#### [30-48: 喪明けの予告]

[30] 宮廷の祭官たち (*abanyamuhaango*)<sup>43</sup> がこの月 (29) を見る。

---

に直属して宮廷で護衛、道化、楽隊、ダンサー、儀礼助手、死刑執行人などの役目を担う家系があった。

<sup>38</sup> [22] 「*Iyombe* の歌」：詳細は不明。この歌は *gicuraasi* 月の王の就寝のためだけに歌われたらしく、他の儀礼では出て来ない。

<sup>39</sup> [23] 「*Impara*」：宮廷で *Ryangombe* 祭祀を行う集団。彼らは純粋の (農民の) *Hutu*、あるいは貴族化された *Hutu* で、*Twa* とともに吟遊詩人でもあり、夜に護衛にも立ち、通常の王の起床時には、手に鈴かガラガラを持ち、野ウサギのしっぽを頭に乘せて左右にバランスを取りながら歌い踊った。詳しくは宇野 2010: 176-177 を参照。

<sup>40</sup> [25] 「起臥太鼓以外は」：朝の起床時には起臥太鼓を鳴らす。就寝時は 21-23 および 26-28 行にあるように別の方法で知らせる。起臥太鼓の使用の朝だけに減らすのは、王の喪の表現にならったものであろうが、上掲「即位の道」307 以下の実際の王の没後の喪中の規定よりは緩い。

<sup>41</sup> [27] 「*Cyirima* 祠」：王宮内に建てられた牛王 (*Cyirima* または *Mutara*) の祠で、王権太鼓などの安置所でもあった。

<sup>42</sup> [29] 「*kamena* の月が現れる」： *gicuraasi* の翌月の三日月が出るまで、この状態が続く。

<sup>43</sup> [30] 「宮廷の祭官たち (*abanyamuhaango*)」： *-haango* 3, 4 は「儀礼、儀式、超自然的な活動に関連する象徴的ないし非象徴的な行動」(Coupez et al 2005: 757)。秘典では *abanyamuhaango* は「*gicuraasi* の道」と「初穂の道」にしか出てこない。*abiiru* (宮廷儀礼家) と同義で用いられているのかどうかはよく分からない。

すると、翌朝、  
 小型リズム鼓 (*ishaakwe*)<sup>44</sup> (38) を配置する、  
 王宮の門 (45) の柱 (*igikiingi cy iireembo*)<sup>45</sup> の近くに。  
 王は朝の挨拶をされる直前に、  
 [35] 家に行って王権金槌 (6, 87) を受取る、  
 発火錐 (6, 87) を受取る。  
 起臥太鼓 (8, 25, 91) が王に朝の挨拶をする。  
 王は小型リズム鼓 (32) を持ち、  
 聖物 (*imaana*)<sup>46</sup> の上に立て、  
 [40] 二回打ち鳴らす、  
 「あさって、早朝に」<sup>47</sup> と言いながら。  
 彼は Cyirima 祠 (27, 55, 85, 96, 105) に行く、  
 彼は月を知らせに行く<sup>48</sup>。  
 彼はすべての屋敷に行く、  
 [45] 王宮の門 (33) の近くの。  
 そして月を知らせる。  
 翌日、同じことをする。  
 王は「明日、早朝に」と言う。

その日の夜に太鼓演奏専門の儀礼家たちが集合し、夜中から朝まで打奏用太鼓たちを一斉に鳴らし続けて喪明けを告げる。

<sup>44</sup> [32] 「小型リズム鼓 (*ishaako*)」：高い音色でリズムを取る小型の太鼓 (Coupez et al. 2005: 2157)。大体の大きさは高さ 47 cm、上面直径 26 cm、下面直径 17 cm、共鳴室の壁厚 2 cm くらい (Ganseman 1988: 208)。

<sup>45</sup> [33] 「門の柱 (*igikiingi cy iireembo*, pl. *ibikiingi by'amareembo*)」：屋敷を囲む塀の入口の両側に立つ太く高い柱 (Coupez et al 2005: 1194, *-kiingi* 7, 8; 1894, *-re-embo* 5, 6)。Kagame 1954: 201 #31

<sup>46</sup> [39] 「聖物 (*imaana*)」：神あるいは神性を帯びたものを指す。占いや供儀に使う動物、あるいはその残骸で作った護符など、色々な物であり得るが、何なのか良く分からない。

<sup>47</sup> [41] 「あさって、早朝に」：明後日の朝に謹慎が明ける。

<sup>48</sup> [43] 「月を知らせに」：*kamena* 月になったと宣言しに。

#### [49-56: 喪明けの合図の太鼓]

専門の宮廷儀礼家<sup>49</sup>が皆、

[50] 太鼓を打つために、

集まってきて、

夜のあいだ、待機する。

真夜中に一斉に起きて、

打奏用太鼓 (9, 92, 105) を

[55] Cyirima 祠 (27, 42, 85, 96, 105) で一斉に打ち鳴らす (*suk*)、

夜通し鳴らし続ける。

#### d. 王権太鼓の復活 (57-85)

前日王が予告したように、この日は早朝から忌み明けの手続きが始まる。その冒頭で、新王を即位させることを任務とする Tege の儀礼王が登場して、*gicuraasi* 月の危機から *kamena* 月の豊穰への移行が、「不敬の道」「即位の道」に規定された王の葬式から新王の即位式への移行に準じて演出される。正常化は王権太鼓から始まる。

#### [57-61: Tege の儀礼王による王権の再活性化の開始]

翌日、Kabagari の住人<sup>50</sup>が

ニガウリ (*imyishywa*) と *imirembe* を持ってきて、

王権太鼓たち (*ingabe*) (2, 62, 77, 84, 110) の上に置く<sup>51</sup>。

<sup>49</sup> [49] 「専門の宮廷儀礼家 (*abiiru*)」: 10 行目の注で触れた Abakaraza を指すか。

<sup>50</sup> [57] 「Kabagari の住人」: 宮廷儀礼家の序列第二位の Tege の儀礼王、Kagame のいわゆる «Mwiru Grand-Intronisateur», つまり王およびすべての儀礼王の即位を司る儀礼家のこと (Kagame 1947: 368-369)。今の Gitarama 地方にあたる Kabagari の Remera に本拠地があった。「Nyabirungu の子孫」とも呼ばれた。彼の最も重要な職務は、ルワンダ王が死んだ際、それを王権太鼓たちに伝え、即位式で新しい王と王母に王家太鼓などを引き継がせることだった (宇野 2012: 53-54; 宇野 2013: 95-97)。

<sup>51</sup> [58-59] 「ニガウリと *imirembe* を王権太鼓たちの上に置く」: ニガウリ (*-ishywa* 3, 4) は豊穰、勝利、喪明けを象徴する植物 (d'Hertefeldt & Coupez 1964: 300-301) で、「即位の道」では即位式の最後の王と牛の再活性化儀礼で使われた (宇野

[60] 宮廷の祭官たちが揃って

着替えの衣服を受取る<sup>52</sup>。

### [62-72: 王権太鼓の復帰]

王が守護祖先霊の前で王権太鼓を打ち鳴らす。そのリズムは王朝の始祖 Gihanga に遡る。王権太鼓は平常時には鳴らさない。鳴らすのは王権を奮い立たせる必要がある場合に限られる。

王権太鼓たち (2, 59, 77, 84, 110) は輿<sup>53</sup> (84) に乗せられ、

宮廷に参上する、

王の父の祠、あるいは祖父の祠に<sup>54</sup>。

[65] 太鼓たちは敷居の上に隊列を成して並ぶ。

Karinga 鼓 (28) が入場する。

王が *igihubi* のリズム<sup>55</sup> (70, 94) で打つ。

四<sup>56</sup> (74, 76, 98, 116) 回。

他の王権太鼓も入場し、

[70] *igihubi* のリズム (67, 94) で打たれる。

いつものように<sup>57</sup>、太鼓たちは王に差し出され、

---

2013: 114, 121, 122, 125)。他方、*imirembe* (-rembe 3, 4) は、「即位の道」21-22で葬式の木として使われた「*umutobotobo* の棘のない種類」であるが、宮廷では葬式の木を燃やして捨てる儀礼を行った後、新しい火を運び込み、遺族を清めて新王の即位式に移る準備を始める (宇野 2012: 59-60, 63-65) ので、ここではニガウリと同じく喪明けを表す象徴として使われているのであろう。

<sup>52</sup> [61] 「着替えの衣服を受取る」：禁欲期間中の「喪服」から着替える。

<sup>53</sup> [62] 「輿」：前後を人が担ぐハンモック型の乗物。

<sup>54</sup> [64] 「王の父の祠、あるいは祖父の祠に」：王宮内には王や王母の先祖を祀った建物があちこちにあったが、占いで吉とされた父方祖先を守護祖先霊 (-*kurambere*) として主殿に祀っていた。ここで「父あるいは祖父」と言っているのは、実際には主殿に祀られている守護祖先を指しており、王権太鼓は主殿に行くことになる。Yuhi V Musinga の Nyanza 王宮では、父 Rwabugiri は主殿に、祖父 Rwogera はその右の建物に祀られていた (Lugan 1997: 200)。

<sup>55</sup> [67] 「*igihubi* のリズム」：王権太鼓を叩く主要なリズムで、初代の Gihanga 王の時代にさかのぼると言われたという (d'Hertefelt & Coupez 1964: 460)。

<sup>56</sup> [68] 「四」：偶数は吉数。98-100 行を参照。

<sup>57</sup> [71] 「いつものように」：*gicuraasi* 月が出て以来、王権太鼓が王に差し出されないという非日常的な状態が続いていたが、それが終わって平常に戻ったので、太

敷居の上まで戻る。

[73-85: 王権太鼓に捧げる牛乳、ビール、武勲詩]

牛乳を持ってこさせる。

四つ (68, 76, 98, 116) の小さな *igicuba* 壺、

[75] *umutagooka* の木<sup>58</sup> でできた壺に入れて。

そして四 (68, 74, 98, 116) 甕の蜂蜜ビール (*uubuuki*) を

太鼓たち (2, 59, 62, 84, 110) の前に置く。

王が味見をし、

宮廷儀礼家たち (*abiiru*) が飲み干す<sup>59</sup>。

[80] 牛乳を宮廷儀礼家たちが運ぶ。

その時、Aka リニジ<sup>60</sup> の人 (*umuwaka*) が武勲詩を詠唱する (*-iivuga*)。

詠唱が終わると、

彼は褒美をもらう。

太鼓たち (2, 59, 62, 77, 110) は輿 (62) に乗って帰る、

[85] *Cyirima* 祠 (27, 42, 55) に帰る。

---

鼓たちは王に差し出される。

<sup>58</sup> [75]「*umutagooka* の木」：秘典ではここにしか出てこない。*-tagooka* 3, 4 はアオイ科 (*Malvaceae*) の *Hibiscus aponeurus*。この木は容器、特にミルク壺を作るのに使われる (Coupez et al 2005: 2402)。言葉遊びがあって、動詞 *-gook-* は、「多くの不幸をこうむる」の意で、それに否定辞 *-ta-* が付いて、*-tagook-* は「災いをこうむらない」となり、この木で作った *igicuba* 壺は厄除けの意味がある。それを吉数の四個使う。

<sup>59</sup> [79]「宮廷儀礼家たちが飲み干す」：王が飲み残した牛乳を儀礼家たちが飲み干した。王が牛乳を全部飲んで容器を空にすると国の面積が減ると信じられていたので、王は常に牛乳を飲み残した (Bourgeois 1954: 47)。

<sup>60</sup> [81]「Aka リニジ」：王家 *Nyiginya* クランの一枝。名祖の *Rwaka* は *Yuhi III Mazimpaka* の子で、*Cyirima II Rujugira* の異母兄。母は *Nyiginya* クランなので、*Rwaka* に王位継承権はなかったが、父王の摂政となり、父王が死ぬと *Karemera I* として即位し、16年間在位した。彼の死後、異母弟で王位継承者の *Rujugira* が即位した。*Rwaka* は *Nyiginya* 王朝の正統の系図からは排除されたが、子孫は大きなリニジを成した (Delmas 1950: 58; Kagame 1959: 86, note 2)。秘典ではここだけにしか出て来ない。

#### e. 王の「即位」と王権の再活性化 (86–110)

王権太鼓の復活に次いで、今度は解毒剤の服用や王権雄牛の入場式が行われる。これらは新王の即位式の仕上げ段階で見られる儀式である。Ndahiro II Cyamatare の喪の後で行われるこの「即位式」は、Cyamatare が失った王国を取り戻した Ruganzu II Ndori の即位を模していると解釈できよう。つまり、*gicuraasi* 祭によって、王は Ndori の生まれ変わりとして毎年即位し直し、王権の衰退を防いでいる。

#### [86–89: 呪薬の提出]<sup>61</sup>

王は家 (*nzu*) に行く。

王権金錐 (6, 35) と発火錐 (6, 36) が差し出される。

Cyimanyi の子孫<sup>62</sup>が来て、

解毒剤 (*isubyo*)<sup>63</sup> を差し出す。

#### [90–95: 王宮外への発信]

[90] 王は玉座 (*utwiicarabaami*) に戻り、

起臥太鼓 (8, 25, 37) が合図する。

打奏用太鼓たち (9, 54, 105) が王宮前広場 (*akaarubaanda*)<sup>64</sup> で打ち鳴らされる。

それらを腕に抱えて運び、

*Igihubi* のリズム (67, 70) で打つ。

---

<sup>61</sup> [86–89: 呪薬の提出]: Cyimanyi の子孫が *-subyo* などの呪薬を製造・提出し、王と王母がそれを服用することは、即位式における儀式の一つである (「即位の道」953–982、宇野 2013: 119–121)。

<sup>62</sup> [88] 「Cyimanyi の子孫」: 詳細不明の儀礼家。彼の仕事は王のために呪薬 (*subyo*) を作ることだった。Cyimanyi の儀礼家の仕事については、「即位の道」250、706–811、954–971、1074 に詳しく出ている (宇野 2013: 102, 注 45, 111–113, 119–121)。

<sup>63</sup> [89] 「解毒剤 (*-subyo* 5, 6)」: 何らかの出来事やタブー違反から生じる悪い結果を防ぐために、鼻から吸い込んだり、水やビールに混ぜて飲む植物性の粉 (Coupez *et al.* 2005: 2351)。王はこれを毎日飲んだ (Pagès 1933: 389–390; de Lacger 1961: 257; d'Hertefelt & Coupez 1964: 305–306 #89; 宇野 2013: 120)。

<sup>64</sup> [92] 「王宮前広場 (*akaarubaanda*)」: (*-arubanda* 12) 王宮の外周をめぐる広場、特に正門前の広場。Pagès が述べた王家の宝物の展示と仮装はこの段階で行われたのかもしれない。



[95] 太鼓の撥 (13) が差し出される。

[96-104: 王権雄牛と雌牛の入場]<sup>65</sup>

雄牛たち (*amapfiz*)<sup>66</sup> (102) が入場し、

Cyirima 祠 (27, 42, 55, 85) に行く。

牛は四 (68, 74, 76, 116) 頭

あるいは六頭

[100] あるいは八頭の組で

入場し、奇数頭では組まない<sup>67</sup>。

雄牛たち (96) はそれぞれ自分の儀礼用の雌牛たちを持ち、

雌牛の群を従えている、一つか、

二つの。

[105-110: 犠牲の雄牛の血を王権太鼓に塗る]

[105] 打奏太鼓たち (9, 54, 92) が Cyirima 祠 (27, 42, 55, 85, 97) に行く。

「戦う者たち (*Indwanyi*)」<sup>68</sup> の雄牛を一頭連れてくる。

---

<sup>65</sup> [96-104] 王権雄牛と雌牛の入場: 「即位の道」992-1002、1045-1070 では、「尊敬すべき者たち」(*Inyubahiro*)、「王権太鼓たち」(*Ingabe*)、「強固にされた者たち」(*Inshya*) の三つの牛軍の王権雄牛が即位式の最後の王国と牛の再活性化儀礼に登場する (宇野 2013: 121-122, 124-125)。

<sup>66</sup> [96] 「雄牛たち」: 王権雄牛を指す。各代の王は自分の治世を象徴する王権雄牛 (ないし「治世の雄牛」) たちを持っていた。王権雄牛の「即位式」を記述した「王権雄牛の道」(*La Voie des taureaux de trône*) という秘典を Kagame 神父は宮廷で採取したらしい (Kagame 1947: 375) が、残っていない。「水飼いの道」の前半に製作手順が詳述された王権太鼓 (宇野 2014) に比べ、王権雄牛に関する情報は断片的である。上記の三つの牛軍の他にも王権雄牛を飼育する牛軍はあったようである (Kagame 1961: 113)。それらの特定の牛軍で飼育された特別の雄牛たちが、王と同じように、「即位」させられ、循環的な王号を与えられた。例えば、Zigaaba クランの Heeka リニジが管理した牛軍「尊敬すべき者たち」に属する王権雄牛は、Rwaza-maliba (放牧地の井戸の清掃者)、Ruyenzi (豹)、Cyubahiro (崇拜) という王号を世代ごとに与えられた (Kagame 1961: 42)。

<sup>67</sup> [101] 「奇数頭では組まない」: 偶数が吉だから。

<sup>68</sup> [106] 「戦う者たち (*Indwanyi*)」: 各牛軍から宮廷に食用肉と血 (王権太鼓に塗る) を取るために供出された雄牛の群の名前 (Kagame 1952: 48; Kagame 1961: 9; d'Hertefelt & Coupez 1964: 447)。その雄牛は王権雄牛ではない。

そしてそれを殺し、血を集める。

一晩そのままにする。

翌朝、

[110] 王権太鼓たち (2, 59, 62, 77, 84) は紐を解かれ、血を塗られる<sup>69</sup>。

#### f. Gaseke の牛王祠での *gicuraasi* 儀礼 (111)

ここは一行しかないが、重要なので独立して扱う。

##### [111: Gaseke の牛王祠でも *gicuraasi* 月の儀礼を実施]

Gaseke でも同じようにされる。

ここで問題にされているのは、Rukoma 西部 (今の Gitarama の Rutobwe) にある Gaseke 丘の頂に立つ牛王祠で、そこには直近四世代以内に死んだ牛王 (Mutara ないし Cyirima) のミイラが祀られ、次の水飼儀礼まで四世代にわたってルワンダの牛たちを見守っていた (詳しくは宇野 2014, 2015 を参照)。牛王祠を管理するのは Tsoobe クランの儀礼家で、水飼儀礼の時と同じように、彼らが牛王に代わって *gicuraasi* 月の儀礼を行ったのであろう。その目的は牛の安全・増殖に特化していたと考えるのが自然だろう。そうであれば、慰霊祭説が問題なく使えそうである。つまり、Ndahiro II Cyamatare が死んでからルワンダでは女性は子供を産まず、牛も増殖しなかったが、Ruganzu II Ndori が戻ると再び増殖を始めたのだった。また、*gicuraasi* 月が予告する大乾期は第2節で述べたように牛にとっても苦難の時節である。

#### g. 「*Gicuraasi* を立ち去らせる」祝祭 (112–125)

最後に、締めくくりの祝祭が挙行されるが、*gicuraasi* 月を各家から去らせ

---

<sup>69</sup> [110]「王権太鼓たちは紐を解かれ、血を塗られる」：王権太鼓は Cyirima 祠に安置されるときは、棚に紐で固定される。この紐は搾乳時に牝牛の後ろ足を杭につなぐのに使うものと同じだといわれる。王権太鼓に雄牛の血を塗るのは、太鼓の力の強化・更新のため。同様の例は、「水飼いの道」638–640 (宇野 2014: 171)、「即位の道」698–705 (宇野 2013: 111) などに見える。

るためには全国民が祭に参加する必要があったらしい。

#### [112-125: 祭のための飲食物の準備]

祭りを行う、

*Gicuraasi* を終わらせるために。

税を払うべき人たち (*abanyamakoro*) がビールと

[115] 他のすべての現物税を支払う。

およそ四 (68, 74, 76, 98) 日のあいだに。

#### [117-121: 禁忌の解除]

結婚することが出来る (17)。

自分の手柄をうたうことが出来る、歓声をあげることが出来る  
(19-20)。

願掛け儀礼をすることが出来る (18)。

[120] この時、誰もが

ルワンダではビールを飲んでいる。

#### [122-125: 全国的な喪明けの祝祭]

人々は言う：「さあ、*gicuraasi* の祭を見に行こう、

この月があなたの屋敷に居残らないように<sup>70</sup>。」

だからこれは皆が楽しむ祝祭であり、

[125] 国中で祝われる。(終)

## 5. おわりに

「*Gicuraasi* の道」の読解を通じて、*gicuraasi* 祭が「不敬の道」と「即位の道」に規定された王の葬儀、服喪、新王の即位式における王国の危機の克服過程を小型化して、毎年半月足らずの間に実施していたことが明らかになったと思う。植民地時代初期の神父たちが言ったように、それは Ndahiro II

---

<sup>70</sup> [123]「この月があなたの屋敷に居残らないように」：*gicuraasi* 月の不吉さをすべて追い出すために。

Cyamatare による王権の喪失、国家の滅亡を哀悼する «le deuil national» (国家的服喪) であり、Ruganzu II Ndori による王権と国家の再興、豊穡の回復を祝う全国的な祝祭であった。豊穡に関しては、この後、もう一つの全国的な祝祭つまり初穂儀礼がより大きな規模で祝うことになる。

## 文献目録

- Bourgeois, R. 1954. *Banyarwanda et Barundi. Tome II. La coutume*. Bruxelles, Institut royal colonial belge. Section des Sciences morales et politiques, Mémoires in 8°, XXXV.
- Bourgeois, R. 1956. *Banyarwanda et Barundi. Tome III. Religion et magie*. Bruxelles, Académie royale des Sciences coloniales, Classe des Sciences morales et politiques, Mémoires in 8°, Nouvelle série, Tome IV, fasc. 2 et dernier. (Ethnographie).
- Bourgeois, R. 1957. *Banyarwanda et Burundi. Tome I. Ethnographie*. Bruxelles, Académie royale des Sciences coloniales, Classe des Sciences morales et politiques, Mémoires in 8°, Nouvelle série, Tome XV, fasc. unique.
- Coupez, A. et Th. Kamanzi. 1962. *Récits historiques rwanda dans la version de C. Gakaniisha*. Tervuren, Musée Royal de l'Afrique Centrale. Annales, série in 8°, Sciences humaines, n° 43.
- Coupez, A., Th. Kamanzi, et al. 2005. *Inkoranya ikinyarwaanda mu kinyarwaanda no mu gifaraansa. Dictionnaire rwanda - rwanda et rwanda - français*. 3 tomes. Butare, Institut de Recherche Scientifique et Technologique / Tervuren, Musée Royal de l'Afrique Centrale.
- d'Heltefelt, 1962. «Le Rwanda», in d'Heltefelt, Marcel, A. A. Trouwborst, et J. H. Scherer. 1962. *Les anciens royaumes de la zone interlacustre méridionale: Rwanda, Burundi, Buha*. Tervuren, Musée Royal de l'Afrique Centrale. Monographies ethnographiques - n° 6. (aussi paru dans la série : Ethnographic Survey of Africa, East Central Africa, Part XIV, London: International African Institute), pp. 9-112.
- d'Heltefelt, Marcel, et André Coupez. 1964. *La royauté sacrée de l'ancien Rwanda : texte, traduction et commentaire de son rituel*. Bujumbura, Travaux de l'Université de Bujumbura, série A. Faculté de Philosophie et Lettres, n° 2 / Tervuren, Extrait des Annales du Musée Royal de l'Afrique Centrale, Série in-8°, Sciences Humaines, n° 52.
- de Heusch, Luc. 1982. *Rois nés d'un cœur de vache. Mythes et rites bantous II*. Paris, Gallimard.
- Delmas, Léon. 1950. *Généalogie de la noblesse (les Batutsi) du Ruanda*. Kabgayi: Vicariat Apostolique du Ruanda.
- Gansemans, Jos. 1988. *Les instruments de musique du Rwanda. Etude ethnomusicologique*. Leuven, Leuven University Press.
- Gravel, Pierre Bettez. 1968. *Remera: A Community in Eastern Ruanda*. The Hague & Paris, Mouton. (Studies in African History, Anthropology, and Ethnology, V.)
- Kagame, Alexis. 1947. «Le code ésotérique de la dynastie du Rwanda.» *Zaire*, 1 (4),

363–386.

- Kagame, Alexis. 1952. *Le code des institutions politiques du Rwanda précolonial*. Bruxelles, Institut royal colonial belge. Section des Sciences morales et politiques, Mémoires, Collection in-8°. Tome XXVI, fasc. 1.
- Kagame, Alexis. 1954. *Les organisations socio-familiales de l'ancien Rwanda*. Bruxelles, Académie royale des Sciences coloniales. Classe des Sciences morales et politiques, Mémoires, Collection in-8°. Tome XXXVIII, fasc. 3.
- Kagame, Alexis. 1959. *La notion de génération appliquée à la généalogie dynastique et à l'histoire du Rwanda des Xe – XIe siècles à nos jours*. Bruxelles, Académie royale des Sciences coloniales. Classe des Sciences morales et politiques, Mémoires in-8°, Nouvelle série, t. IX, fasc. 5.
- Kagame, Alexis. 1961. *L'histoire des armées-bovines dans l'ancien Rwanda*. Bruxelles: Académie royale des Sciences d'Outre-Mer. Classe des Sciences morales et politiques, Mémoires in-8°. Nouvelle série. Tome XXV, fasc. 4.
- Kagame, Alexis. 1963. *Les milices du Rwanda précolonial*. Bruxelles: Académie royale des Sciences d'Outre-Mer. Classe des Sciences morales et politiques, Mémoires in-8°. Nouvelle série. Tome XXVIII, fasc. 3. (Histoire).
- Kagame, Alexis. 1969. *Introduction aux grands genres lyriques de l'ancien Rwanda*. Butare, Editions Universitaires du Rwanda.
- Kagame, Alexis. 1972. *Un abrégé de l'ethno-histoire du Rwanda*. Tome I. Butare, Editions Universitaires du Rwanda.
- Lestrade, Arthur. 1972. *Notes d'ethnographie du Rwanda*. Tervuren, Musée Royal de l'Afrique Centrale. Archives d'Anthropologie, n° 17.
- Leurquin, Philippe. 1960. *Le niveau de vie des populations rurales du Ruanda-Urundi*. Publication de l'Université Lovanium de Léopoldville, 6. Louvain, l'Institut de Recherches Économiques et Sociales; Louvain, Éditions Nauwelaerts; Paris, Béatrice-Nauwelaerts.
- Lugan, Bernard. 1997. *Histoire du Rwanda. De la préhistoire à nos jours*. Paris, Bartillat.
- Pagès, A. 1933. *Au Ruanda sur les bords du lac Kivu (Congo belge). Un royaume hamite au centre de l'Afrique*. Bruxelles: Institut Royal Colonial Belge, Section des Sciences morales et politiques. Mémoires. – Collection in-8°, Tome I.
- Pauwels, R. P. Marcel. 1969. «L'agriculture au Rwanda et tout ce qui s'y rapporte», *Annali di Pontificio museo missionario etnologico*, vol. 33, 31–123.
- Sirven, P, J. F. Gotanegre, et C. Prioul. 1974. *Géographie du Rwanda*. Bruxelles, Editions A. de Boeck; Kigali, Editions Rwandaises.
- Vansina, Jan. 2001. *Le Rwanda ancien : Le royaume nyiginya*. Paris, Karthala.
- Vansina, Jan. 2004. *Antecedents to Modern Rwanda. The Nyiginya Kingdom*. Translation by the author of *Rwanda ancien* with an update to the chronology between 1876 and 1885. Madison: University of Wisconsin Press.
- 宇野公一郎 2007 「ルワンダの王と王母の系譜の構造」『論集（東京女子大学紀要）』57 (2), 113–150.
- 宇野公一郎 2010 「ルワンダ王国の政治思想における《祖国のために死ぬこと》」『論集（東京女子大学紀要）』60 (2), 167–206.
- 宇野公一郎 2011 「ルワンダ王国の戦勝儀礼」『論集（東京女子大学紀要）』61 (2),

95-138.

宇野公一郎 2012「ルワンダ王の葬式」『論集（東京女子大学紀要）』62(2), 47-85.

宇野公一郎 2013「ルワンダ王の即位式」『論集（東京女子大学紀要）』63(2), 87-139.

宇野公一郎 2014「ルワンダの王権再生儀礼（1）：王権太鼓の更新」『論集（東京女子大学紀要）』64(2), 121-175.

宇野公一郎 2015a「ルワンダの王権再生儀礼（2）：水飼い儀礼」『論集（東京女子大学紀要）』65(2), 111-158.

宇野公一郎 2015b「ルワンダ宮廷の火の儀礼」『論集（東京女子大学紀要）』66(1), 73-101.

キーワード

ルワンダ、王権、gicuraasi の道、Ndahiro II Cyamatare、Ruganzu II Ndori、国家的服喪